

日本産漆を支援する

NPO法人

# 壺木呂の会

I C H I K I R O

－ 漆掻き会員制度の発足と懇談会へむけて－

会報  
第18号 / 2019年4月発行



3	—	漆掻き会員と懇談会について	理事長	本間 幸夫
4	—	丹波漆の活動と現状について	特定非営利活動法人 丹波漆	山内 耕祐
8	—	石川県加賀市山中における 山地でのウルシ植栽	正会員	辻 新太郎
10	—	漆サミット2018 in 岩手 「2018年 漆サミット・ 漆DAYSいわての感想」 「漆サミットに参加して」	賛助会員 賛助会員	河口 津慶 松浦 弘展
15	—	うるし言の葉「漆掻き作業（茨城県奥久慈地方）」	賛助会員	吉川 由季子

[表紙]



漆掻き作業  
ウルシの木から漆液を採取する作業。6月上旬より始まる。漆掻き作業がしやすいように周囲の草刈りから始まり、目立て、初辺、盛辺、遅辺、裏目掻きと10月上旬まで続く。

## 漆掻き会員と懇談会について

理事長 本間 幸夫

皆様にはいつも壱木呂の会の活動にご支援を賜り感謝申し上げます。

平成9年5月、会の発足から22年目になりますが、この会報が平成最後の会報になります。

表題の会員制度と懇談会について少し説明させていただきます。

壱木呂の会は発足以来22年、日本産漆の振興と正しい技術等の継承を大きな柱として活動を展開してきました。

正会員への荒味漆の頒布からはじまり、賛助会員制度の新設・見本林造成・漆の木のオーナー制度・ウルシ苗木支援・展覧会など広報活動・優良苗木の品種特定への協力・また現在進行中の漆掻き道具の技術を精細な映像とテキスト3Dプリントによるデータとしての保存事業と茨城県奥久慈地方「漆の分根法」神長正則の仕事という本の出版：

近年その活動範囲も広がってきていますが、皆様のご支援により常に上記の主旨に沿って進めてまいりました。

漆掻き会員制度を新設した背景ですが、4年前の2月に出された文科省通達以来、日本各地で日本産漆を植えて育てようとの機運がにわかに進んできました。

しかしながら現在漆生産の多くを担っていらっしゃる漆掻きさんは70歳以上の方が大変多く、現在進められている植栽が漆を採取できるようになるには10年から15年にわたる歳月が必要になります。しかしその頃には現在中心的な仕事をされている方の大半は、年齢的にもその仕事を続けられない方が多くなる筈です。

昨年発足したばかりの漆掻き会員制度（60歳未満の年齢制限あり）ですが、40年近い漆掻き激減の実情を顧みたととき、その要因の多くは経済的に成り立たなかったことと、需要の先細りがあり、後継者が育っていないませんでした。

現在文科省通達により需要面で量的には問題ありませんが、それが永久に保証されるものでもありません。また需要側の極端な偏りがあることも否めません。

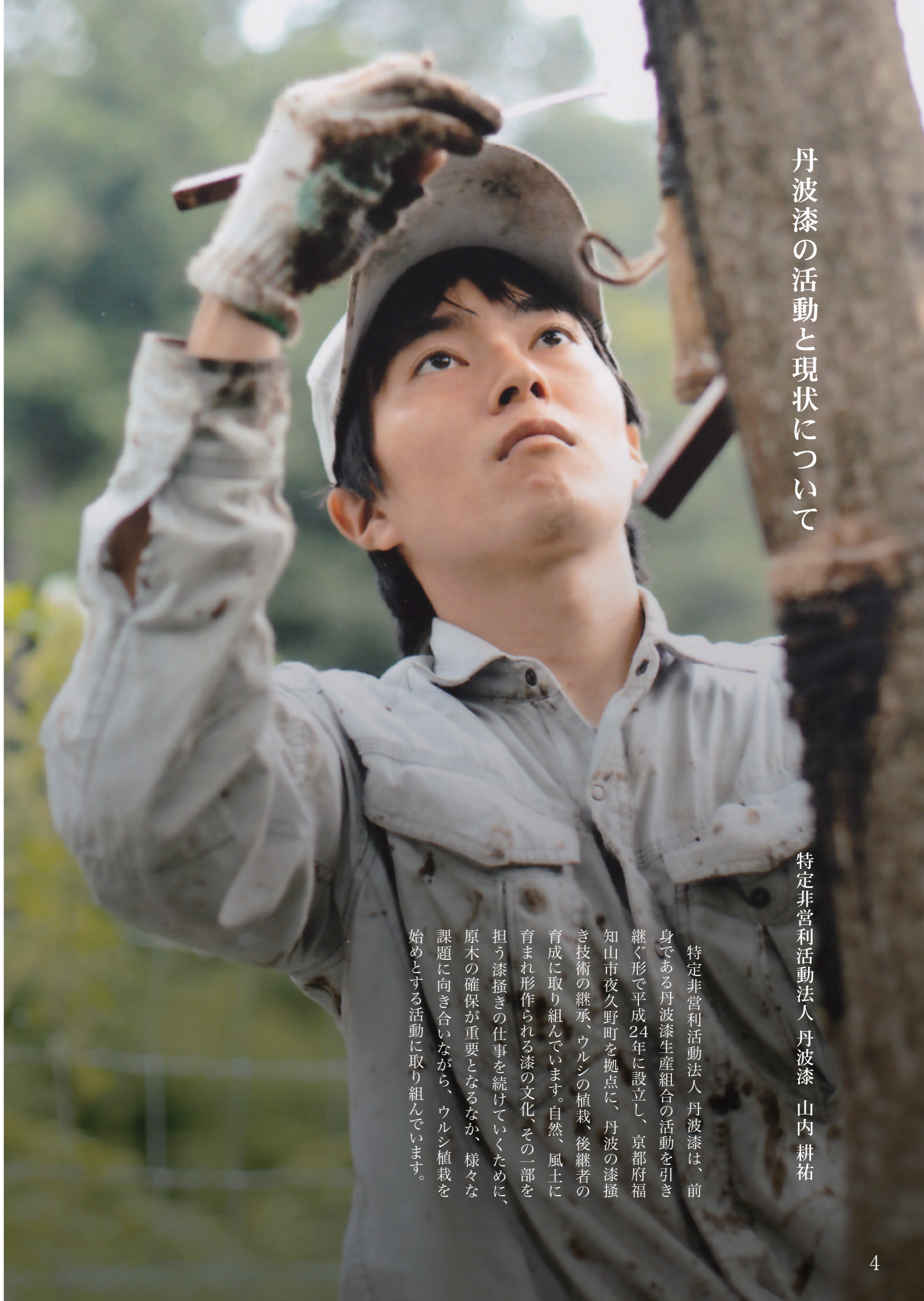
今後各地で活動する若い漆掻きの皆様が、経済的にも自立し内容の濃い仕事を前向きにしていたくために、今かかえている問題点などを伺えればと考えます。その問題点には共通点も又地域的な特性もあると思いますが、それらを掘り起こし行政や、ユーザーも認識を共有することが重要と考えています。今後の日本産漆の未来はその若い漆掻きさん達の肩に掛かっています。

そこで会では4月20日、21日の両日、東京で「漆掻き懇談会」を企画、日本各地からできるだけ多くの方にご参加頂き、若い漆掻きさんがどのようなことを考えておられるか、生の声を拝聴し今後の活動に反映させてゆこうと考えています。

そしてその方々が近い将来、共有しあえるネットワークづくりをと考えています。壱木呂の会はそのお手伝いできれば幸いです。

その懇談会の報告は、新たな元号での次号に報告させていただきます。

特定非営利活動法人 丹波漆は、前身である丹波漆生産組合の活動を引き継ぐ形で平成24年に設立し、京都府福知山市夜久野町を拠点に、丹波の漆掻き技術の継承、ウルシの植栽、後継者の育成に取り組んでいます。自然、風土に育まれ形作られる漆の文化、その一部を担う漆掻きの仕事を続けていくために、原木の確保が重要となるなか、様々な課題に向き合いながら、ウルシ植栽を始めとする活動に取り組んでいます。



漆植栽地

昭和30年頃までは夜久野町にもウルシ林が多く在ったと言われますが、森林のうち杉・檜の人工林が61%を占める状況となった現在、それらは殆ど残されていません。漆掻き職人が継続して漆を掻き、技術を磨き次に伝えていく為には、ある程度の規模のウルシ林が必要であり、掻く事と植え育てることをセットで行っていく必要があります。それを実現することを目標にウルシの新植を進めています。

現在、丹波漆では13ヶ所のウルシ植栽地で約千本のウルシの植栽を行っています。順調な場所もありますが、多くが枯れてしまった場所もあり、様々な課題があります。健全な木でなければ漆掻きは出来ず、かつ限られた土地を活用するため、百本植えたら百本掻けるように育てることを目標にしています。

地域の過疎化高齢化が進み耕作放棄地が増えるなかで、丹波漆では、とりわけその多くを占める水田跡地を、ウルシ植栽地として活用しようと取

り組んできました。しかしながら、水田跡地の植栽地で定植から数年後、湿害が原因と思われる生育不良が多く発生してしまいました。排水を良くするため、排水溝の設置や盛り土など対策を行いました。が解決には至りませんでした。このような植栽地も含め、各植栽地の環境やウルシの生育状況の調査を続け、どの様な条件であれば健全なウルシの育成が可能なのか、理解を深めることが課題と考えています。それを踏まえ、既存の植栽地を適正に管理するとともに、よりウルシに適した土壌を選び植えることも重要だと考えています。

また近年では、これまでに経験したことのないような異常気象による被害も発生しています。平成30年の夏には、約一ヶ月間に及ぶ高温と乾燥に見舞われ、立ち枯れが発生しました。現時点で立ち枯れの原因を完全に特定できていないわけではありませんが、今後は極端な気象にも対応できるように植栽地作りを考えなければならぬと感じます。



生育状況調査

さらに、獣害も植栽の大きな障壁となつています。夜久野近辺ではシカ・イノシシによる農作物等への被害が激しく、ウルシも例外ではありません。新芽や樹皮が齧られ、枯れることもあるため、獣害対策が必須となっております。現在は、高さ約2mのフェンスで全ての植栽地を取り囲むことで、シカ・イノシシの侵入を防いでいます。新規植栽の際にはそれによりコストが増加します。また、老朽化や様々な外的要因による劣化により、補修や付け替え等の継続的な保守管理が必要となります。堆肥などを施肥するとミミズが増え、それを察知してイノシシが侵入、イノシシはウルシに致命傷を与えませんが、イノシシが破ったフェンスから鹿が侵入し被害を受け枯れる、という具合に、被害があることで植栽の様々な面に影響が及びます。確実でより効率的な獣害対策の検討も大きな課題です。

この他にも色々な課題がありますが、ひとつひとつ解決に向け取り組み、着実に植栽を進めて行けるようにしたいと思っております。

地域ごとに条件が異なり、一律に解決策が存在するものではないと思いますが、他の地域で活動されている方々との情報交換を通し、丹波漆の現状を知っていただき、アドバイスをいただく事がとても重要だと感じています。

私にとって、吉木呂の会は、普段お会いする事の出来ない方々と出会うことの出来る大変貴重な機会であり、そのネットワークに加えて頂けることを、誠にありがとうございます。

どうか丹波漆の活動に御理解を頂き、御指南を賜りますようお願い申し上げます。



# 石川県加賀市山中における山地でのウルシ植栽



参加者の皆さん



急斜面に悪戦苦闘



漆の苗木

平成27年3月の植栽会



樺と漆の苗木が植えられた斜面(平成27年3月)



辻新太郎と成長した漆の苗木(平成30年3月)

石川県加賀市在住の正会員の木地師 辻新太郎氏がご自身の持山に樺と漆の苗木を植林することになり、杓木呂の会では漆の苗木200本を支援しました。

平成27(2016)年3月26、27日に、1泊2日で山中温泉菅谷町にて植栽会を行いました。辻氏が主宰する工藝の館のスタッフと石川県挽物轆轤技術研修所の研修生と共に植林しました。それから3年が経ち、その後の混合林の経過報告を辻氏にお願いしました。

山地への植栽という杓木呂の会では初めてのウルシ苗の支援活動でしたが、ケヤキとの混合林という山中ならではの発想と思います。植栽した山を竜巻が通過して大きな被害もあったようですが、根は活着しているようです。

辻氏が以前地元の畑に植えたウルシを拝見したことがありますが、その成長は今の山地のものとは比べられないほど成長が良かったことを記憶しています。ウルシを植えた山はその畑と1kmほどのところですが、杉林の伐採後という特徴かもしれません。少し時間はかかると思いますが、杓木呂の会も地元の方々と成長を楽しみにしています。

.....

正会員 辻新太郎

## 平成26年

杉林を伐採、原木を売却。  
 樺と漆を植林しようと計画。  
 樺だけだと下から枝が出てだめ、漆だけだと10年で根腐病になりやすい。  
 以上の理由。

## 平成27年

かが森林組合(以下森林組合)に樺と漆の苗木を植える場所の穴を掘ってもらう。  
 3月中旬、森林組合の指導者に樺の苗木を植えてもらう。  
 3月26日、杓木呂の会の皆さん、研修生の皆さんで漆の苗木を植える。  
 7月下旬、森林組合に植林地の下草刈りをしてもらう。

## 平成28年

7月下旬、森林組合に植林地の下草刈りをしてもらう。

## 平成29年

5月中旬、森林組合に下草刈りと肥料(粒肥料)を土中に埋める。  
 10月中旬、植林地を竜巻が通り、隣の杉並木10数本が植林地に倒れ被害あり。

## 平成30年

7月下旬、森林組合に植林地の下草刈りをしてもらう。

以上。本年(平成31年)3月下旬、粒肥料をやってもらう予定。  
 植林地の管理をしている、かが森林組合が石川県林業試験場から、平成30年4月にアドバイスを受けています。

以下資料から抜粋

ウルシの木 163本 ケヤキの木 160本(平成30年4月現在)

「石川県林業試験場に現地の生育状況を見てもらったところ、ケヤキについては、生育が遅く獣害など(食害)の被害を受けている苗木があります。

またウルシについては、年に30cm程度伸びていることが確認でき順調に成長していると考えられます。中には雪害などにより折れてしまった苗木がありますが、根株部分から萌芽していることから根株がしっかり根付いていることがわかります。補植については融雪後早々の3月下旬から4月上旬ごろが良いとのことです。」

2018年漆サミット・漆DAYSいわての感想

賛助会員 河口 津慶

2018年11月23日、24日と第10回『漆サミット2018 in 岩手』（日本漆アカデミー主催）に参加してきました。私にとっては実に久しぶりの盛岡で、会場は盛岡駅前の「いわて県民情報交流センター（アイーナ）」。そこは地上9階（地下1階）の全面ガラス張り、半分が巨大アトリウムになっているすごい建物で、岩手県主催の『漆DAYSいわて2018』との同時開催に納得し、私にとつての4回目のサミットは多くの期待で始まりました。

二日にわたる会期は漆サミットと漆DAYSいわての講演やイベントが入れ子になりながら進み、参加者はどちらにも自由に参加できる形になっている一方、そもそも全ては聞けないくらい盛り沢山でした。そして会場の入り口広場には、岩手県浄法寺産をはじめとする16社もの漆製品の展示や販売が人目を引き付け、また漆のアクセサリやキーホルダー作り、漆皿の絵付け体験、金継入門のワークショップも開催され会期中多くの方々がそこで漆にかかわる思いを聞かれながら、漆製品の良さに感じ入っている光景がたくさん見受けられました。

室瀬和美先生の基調講演「国産漆使用100%化を目指した国宝・重要文化財建造物の修

理」では、冒頭、先生の昨年の海外出張が7回もあり、漆への注目が世界的にも上がっているとのこと。文化財の保存活動では、厳島神社、平等院鳳凰堂、高台寺御霊屋にならび、琵琶湖竹生島の都久夫須麻神社の本殿（国宝）修復での桃山時代独特の蒔絵の現状保存に尽くされたお話などが紹介されました。そして常に国産漆の優秀さを提唱されている先生があらためて国産漆は、①硬化した塗膜表面が硬い ②接着力が強い ③塗膜の透明度が高い ④塗膜の艶が半艶である ⑤硬化の過程の温湿度に敏感である。という特徴をもつこと、故に日本産漆は使い手の力量を必要とするものの、それを使いこなすことで素晴らしいものになる、と力強く結んでおられました。

漆DAYSいわての基調講演として、日光社寺文化財保存会の佐藤則武氏のお話「日光の建造物漆塗 漆の役割」は実に圧巻でした。それは日光東照宮造営の元和3年（1617）から昭和までの19回の大修理（+3回の修理）を経た現在まで400年にわたる漆塗りと劣化の実際についての分析と文献研究の成果として、現在の修理内容と現場での精緻な対応に至ったという内容なのです。例えば、国産20%中国産80%のブレンド漆を使用した昭和56年修理後の著しい劣化の事実を

一例としながら、今は手間を惜しまず、国産漆100%を江戸時代の技法に則り精製し、漆生産の素性に即した漆利用の最適化例等（「盛岡は中塗り上塗り等精製して塗膜上層部に」末辺…下地として利用」裏目…昭和50年頃までは下地として多用、帆色漆6・裏目4くらいの比率で調合した帆瀬漆にすると金泊押しに最高」「紫外線劣化暴露試験…鉄粉黒目、水酸化鉄黒目、鉄粉黒目による上塗り、松煙などの顔料は込まない」の話は素人にも伝わる地道な漆塗り研究の集大成でありました。その結果、建物の構造木材には「不朽・劣化が見られず、建物に格式を持たせる大きな力が漆によって得られている」事実から国産漆100%で修理した陽明門には600kgの漆が使われ、日光の文化財指定建造物110棟を漆が守る」と結ばれていました。日本の貴重な文化財が国産漆とそのような地道な日々の努力により守られていることに感謝であります。

その後2日間にわたった講演や個々のディスカッションは、研究者や行政の方をはじめ、漆芸家、漆器生産者、漆製品事業者の方々により全20もあつたのですが、どの発表者も漆に対する熱い想いを背景に、それぞれの活動を報告されていたのが印象的でした。あえてこの会のメッセージが何であつたかを考えると、国産の漆を基軸に、本物の漆の製品を、知恵を使いクリエイティブに盛り上げないといけないのではないか、というものだった



漆芸家 室瀬和美氏の基調講演



アイーナ804会議室での講演の様子



いわて県民情報センター(アイーナ)

じました。行政の本腰は国産漆には何よりの事だ  
とおもいます。

最後に、私にとって漆サミットでなんとも楽し  
いのが懇親会なのですが、毎回、公式の懇親会か  
ら始まって、漆アカデミーのメンバーにお誘い頂  
漆を愛する面々との懇親は、実に多方面多彩な  
関係者とのフランクな交流の場であり、漆が好き  
というだけで参加資格のある漆サミットの魅力で  
あり会の在り方を具現しているように思います。  
今回もそんな漆LOVEに満ち溢れた素晴らしい  
二日間でした。是非皆さんも来年はご参加くだ  
さい。

さて、翌25日の日曜、漆サミットの行事は盛岡  
から南の平泉に移動し、中尊寺と平泉文化遺産  
センターの見学でしたが、私はそれに惹かれつつ  
もお断りし、朝車を借り、自身初の浄法寺に向か  
いました。盛岡から1時間余りの浄法寺の漆畑  
は、シーズンが終わった後でしたが、腐葉土が真っ  
黒で、歩くと「ふかふか」だったのと、殺し掻きさ  
れた漆の木がかなり太く一部枝掻きもされていた  
のが印象に残りました。また専門家からも薦めら  
れた浄法寺歴史民俗資料館は、漆関係の日常活  
動にまつわる歴史的資料が充実した素晴らしい  
展示でした。帰りには浄法寺漆を使った安比塗  
りの工房兼お店でお薦めの素敵なスプーンを購  
入し、今回の漆サミットも大変満足なものにな  
りました。



豊富な落ち葉でふかふか



浄法寺地域活性化センター前漆畑



真っ黒な腐葉土



太い枝の枝掻きの跡



実に太い漆の木



杵木呂の会 ポスター発表



懇親会



アイーナスタジオ

ように感じました。やや象徴的な例ですが、筑  
波大学宮原克人准教授の「漆芸の作品を社会に  
還元することを目的とした活動」で、食の体験を  
通じどのような漆器を作るかをワークショップ的  
に見出したり、会津大学井波純教授の「あいつま  
ちなかアートプロジェクトを通じた活動」で、身  
近な人に漆の魅力を多面的かつ重層的に感じて  
もらい、少数でも強く濃い漆ファンを作ったりし  
たように感じました。

講演もそうでしたが漆サミットでは欠かせない  
ポスター発表には26本の報告があり、明治大学を  
筆頭に自治体やNPOはじめ今回は中国の南京  
林業大学の研究者まで、実に多くの漆にまつわる  
組織からアカデミックな研究報告がされ、杵木呂  
の会からも「漆掻き道具の技術伝承」について発  
表し、多くの方の耳目を集めていました。

今回岩手県存在感がすごく大きく感じられ  
たのですが、国産漆の最大供給地である二戸市浄  
法寺を中心に国産漆をリードする強い意気込み  
と、県としてもっと発展させるという力強さを感じ



アイーナ 804 会議室にてパネルディスカッション



アイーナスタジオでの講演の様子



講演後の質疑応答

漆サミットに参加して

賛助会員 松浦弘展

「重要文化財・国宝の修復には日本産の漆を使用すること」

下村博文文部科学大臣（当時）はこのように発言しましたが、当時まだ漆器に興味はあっても漆の世界に関わっていなかった自分には「日本の大切な遺産なのに何を今更…」と思いました。むしろ他国の漆が日本の遺産に使用されていることに驚いていくくらいでした。

現在では壱木呂の会の活動に参加し国産漆の現状について多少なりとも理解しており、当時のこの言葉がいかに漆業界にとって衝撃のある発言であったのかを理解できました。

今回、漆サミットに参加しましたがこの日本産漆というものを様々な視点から考え、いかにこの日本にとって漆が大切な文化であるか、一方でこの漆を取り巻く環境がいかに厳しい状況であるかを改めて理解することができました。

この漆サミットでは、縄文時代の漆、漆に関する科学、新しい漆の利用、漆による地域活性化など様々な観点から漆について考え、また作家や学者、行政、民間企業と幅広い方々が参加し、漆という共通項を様々な角度から考え、普段交流のない人たちがこうした場で関わり合い漆の文化発展に寄与していると感じました。

正しく、官民学が一体となってこの漆を盛り上げていこうとしていることを感じた3日間でした。

### うるし 言の葉 3

賛助会員 吉川 由季子

漆の採取は以前から1シーズン（6月中旬から11月中旬）で約300〜400本の本木（漆掻きさんによって違う）を1日70〜80本くらいずつ4日のサイクルで繰り返し掻いていく。ウルシの木1本につき、左右それぞれ5〜6段分を毎回1本ずつ傷をつけては漆をさらう。4日かけてひと通り傷をつけたら初日の木に戻る。このサイクルを1シーズンに20数回繰り返す。漆を採取するには苗木を植えて10〜15年、直径10〜15cmに育つ必要がある。1本の本木から取れる漆の量はわずか牛乳瓶1本分（200g）程度である。

#### ① 山入り

6月上旬、漆を掻き始める前に、その年に漆掻きするウルシの木の確保と、4日分の場所を決め、後の漆掻き作業がしやすいように周囲の草刈り等準備をする。

#### ② 目立て

漆の採取をするのに、ウルシの木に刃掻きする位置を決めるために最初につける傷。

6月上旬にそれぞれのウルシの木につける。地上約20cmの高さに約2cmの傷をつけ、一番下の掻き始める位置を決めたら、次の掻き始める位置



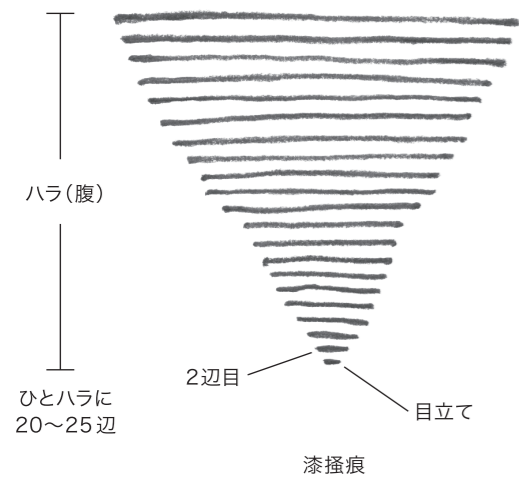
をそれより約35cm上方へ傷をつける。このようにして5〜6段分の傷をつける。また幹の反対側にも先につけた表の「目立て」と位置が重ならないように、交互に同様の傷をつける。

#### ③ 刃掻き

刃とは漆を採取するために、ウルシの木の幹につけた傷。

目立て後およそ4日目、前につけた「目立て」の傷の上側に、傷をつけていく。急に長い傷をつけて強い刺激を与えると、木が弱ってしまうので、前の刃よりもそれぞれ少しずつ長めの傷をつけていく。2辺目は目立てよりやや長い傷をつけるが、これは木に刺激を与え、漆の分泌を促すため採取はしない。3辺目から傷に染み出た漆を採取する。少しずつ辺の長さを延ばして漆を掻き、このような作業を10月上旬まで続ける。

これを刃掻きといい、採取時期により初辺、盛辺、遅辺（岩手県・二戸市浄法寺では末辺漆という）に区別される。刃掻きは木の太さによって、木のまわり数カ所で行うこともある。



※浄法寺漆について岩手県浄法寺漆生産組合前組合長・工藤竹夫氏、奥久慈漆・漆の精製等については奥久慈漆生産組合組合長・神長正則氏の指導を戴きました。漆掻き作業（茨城県奥久慈地方）は次号に続きます。






会報  
第18号 / 2019年4月発行  
- 漆掻き会員制度の発足と懇談会へむけて -

NPO法人 老木呂の会事務局

〒167-0052 東京都杉並区南荻窪 2-27-3

Tel:03-3334-0628 Fax:03-5930-4147

<https://1kiro.jp/> ✉ [nihonsan@1kiro.jp](mailto:nihonsan@1kiro.jp)

 <https://www.facebook.com/1kiro.jp/>